油屋熊八翁の実像を探る

三重野　勝　人

はじめに

油屋熊八という人物は、戦後、別府観光の最大の貢献者として注目され、頌徳碑も建立されてその功績が称えられている。しかし、熊八の確たる足跡となると、虚実入り混じった伝聞が散見され、それが市井に流布して実像掌握を困難にしているのが現実である。

熊八に関する主な「伝記」・「小説」などに次のようなものがある。

兼子鎮雄「観光別府の先覚者油屋熊八翁」　昭和二七年（一九五二）孔版）

兼子鎮雄「油屋熊八」『大分県の産業先覚者』所収　昭和四一（一九六六）

志多摩一夫『油屋熊八伝』　別府市観光協会　昭和五四年（一九七九）

是永勉「別府今昔〈流川編〉』　大分合同新聞社　昭和四一年（一九六六）

村上秀夫『アイディアに生きる小説油屋熊八』　別府市観光協会　昭和五九年（一九八四）

佐賀忠男「湯煙り太平記」　西日本新聞連載　昭和五九年（一九八四）

岩藤みのる『甦れ　熊八たち』　平成一一年（一九九九）

「グラフ」『地獄のある都市』　別府市観光協会　平成一四年（二〇〇二）

本稿は、これら諸著作の実績を踏まえ、新たな資料を参照して一歩でも熊八の実像に迫ろうと試みたものである。忌憚のないご批判、ご助言など頂ければ幸いである。

一　知人の証言に見る油屋熊八の人物像

宇都宮則綱『回顧七十年』

表題の『回顧七十年』や後述する「座談会」の記録は、永年熊八と身近に接した人々の回顧談である。まずはこれらを紐解くことから始めよう。

『回顧七十年』は、県会議員・衆議院議員を歴任し、ホテル・地獄経営者として別府温泉観光にも功績を残した宇都宮則綱の「自叙伝」である。その書に次の一文がある。

素っ裸の油屋熊八はバクチ（株）好き女好きの、われわれと余り違わないただの人で、いつも株をやる資金を集

めるのに苦労していた。しかし油屋さんが偉かったのは、一身一家のためにではなく、別府市のために、頼まれもせぬのに身銭をきって別府温泉の宣伝に尽くしたことである。

この人物評は、素っ裸の熊八を端的に言い表し、核心をついているように思われる。

油屋熊八翁をしのぶ座談会

昭和二五年（一九五〇）七月二七日、亀の井ホテルにおいて「別府国際観光温泉文化都市建設法」制定を記念して、「油屋熊八翁をしのぶ座談会」が開催された。参加者は次の人々を含め二三名であった。（別府市在住者は市名を付さず）

佐藤巌（大分県観光協会事務局長）・藤井文雄（トキワ百貨店社長）・佐藤通（佐藤敬画伯厳父）・小川幸三郎（不老町医師）・金田源太郎（不老町元警察署長）・兼子鎮雄（元別府中学校長）・杉原時雄（亀の井バス専務）・下河原政治（下河原医院長）・工藤元平（久住町元郵便局長）・亀井アイ（亀の井ホテル）・安武ノブ（同）

（「二豊の文化」昭和二五年九月号）

出席者の熊八評は、何よりも先ず〝打算を考えない行動の人〟〝私欲を捨て別府宣伝に邁進した人〟という点で共通している。ホテル専任の看護師を務めた安武ノブの次の言葉が、その見方を代表している。

油屋さんは新しいことを考えだしては直ちに実行される方でした。（中略）一口に申しますとソロバンを忘れた方だと思います。（中略）私利私欲を離れて只もう別府のために終始された方だと思います。

安武ノブその人も、大正一三年から昭和一二年まで一三年間にわたって専任看護師として雇用された婦人であるが、「その間重患者七十余名を看護」したという。これが「安心してお客さんが入湯出来るように――いうのが油屋さんの信念」（安武談）であったとしても、小さなホテルに専任看護師を雇用する発想は前代未聞であり、それを平然と実行に移すところに熊八の面目があった。

このような熊八の特性は、ホテル経営にも具現された。ホテル専務杉原時雄談。

油屋さんのホテル経営は「楽に来てもらって気持ちよく遇する」というにあったと思います。（中略）月の半ばは旅行また旅行で方々の施設やサービスを見て歩きました。（中略）うちに帰って来ると自分の居間に入らずに一々お客さん方へ挨拶回りに出掛けるといった風でした。

私費を以て一流の文士画家等を招聘したことも、今の人には到底真似の出来ぬことです。

座談会ではほかにも多くの証言があるが、次節以下で適時紹介し熊八に対する理解を深めたいと思う。

二　別府前史―宇和島・大阪・アメリカ―

人生スタート

油屋熊八は文久三年（一八六三）、愛媛県西宇和郡三崎村字佐田（現宇和島市）の米問屋油屋正輔の長男として誕生した。油屋の姓はもとの家業名を取ったものである。時代が大転換した明治元年（一八六八）には熊八は五歳、寺子屋などで学び、一五歳になると家業（米穀問屋）に精出しよく働いた。

明治二一年（一八八八）、熊八は旧宇和島藩主伊達宗城（だてむねなり）側用人戸田義成娘ユキを娶り新たな人生へスタートした。この年、市制町村制が、また二三年には議員選挙も実施され、熊八は、三崎町々会議員に選ばれ米穀問題などの解決にあたったという。

一獲千金の夢・相場師に賭けた大阪時代

明治二四年、厳父正輔が没した。この年熊八は宇和島の家業に見切りをつけ大阪に転出した。佐藤巌は次のように語っている。

大阪に出て時事新聞に入り、経済記者をしながら株の研究をやったりしましたが、一挙に二百万円も儲けたことがあったそうです。

一時は「常勝将軍」の名を馳せたが、日清戦争後の景気の変動に対応しきれずに遂に廃業に追い込まれた。

活路を求め単身アメリカへ（明治三〇年～三三年）

明治三〇年（一八九七）、熊八は単身アメリカ合衆国へ渡った。相場で失敗したことが契機であった。滞米生活の詳細は不明であるが、兼子鎮雄は次のように述べている。

アメリカに着いた彼は、持っていた四円弱の金を全部教会に寄付して全くの無一物となり、一個の皿洗いとなり、北はカナダより南はメキシコに至るまで（中略）歴訪し、（中略）大いに得るところがあった。明治三十三年三十八歳のとき、彼は帰朝に先立ってサンフランシスコで、三谷牧師によりて洗礼を受け基督教徒となり（中略）物質上の富のほか精神上の富を求めるに至った。（「油屋熊八翁」）

明治三三年、熊八は三年間の滞米生活に終止符を打ち帰国

の途についた。米国での生活は、非常に貴重な遺産を熊八にもたらした。英会話の習得、近代的な米国市民生活の体験、そして何よりも勤労と愛を尊ぶプロテスタント的な倫理道徳に直接触れたことなどがそれである。これらは熊八の旅館経営や観光事業の有り方に非常に大きな影響を与えたものと考えられる。帰国した熊八は、しかしまた元の相場の世界に頭を突っ込み、新たな事業への転換にはなお一〇余年の歳月の経過を待たねばならなかった。

三　別府定住と亀の井旅館の創立

日豊線開通と別府転身

熊八の別府転身について「大分新聞」は、熊八逝去の報道の中で「氏は明治四十一年別府に来てささやかな旅館亀の井を創業」と記し、四一年を熊八別府転身の年と位置付けている。その直前、明治三九年（一九〇六）には別府、浜脇両町が合併して新別府町が誕生している。明治四四年には日豊線小倉―大分間が開通、四五年（大正元年）には大阪商船の別府・大阪専用航路も開かれ（隔日出帆）、別府は浮揚期を迎えつつあった。熊八が別府定住の決意を固めたのはこの前後のことであろう。

亀の井旅館創業と宣伝活動

明治四四年日豊線開通の年、一〇月一日、熊八（四九歳）は亀の井旅館を創業した。木造二階建て、一階八畳・六畳、二階六畳・三畳の小さな旅館であった。（34頁参照）創業の経緯については諸説あるが、熊八を陰ながら支えた佐藤通は次のように語っている。

> 日本に帰ってきて間もなく、（中略）旅館をやるから家を貸してくれと云うのです。私の家は二階二間、下が二間、それに離れがあったのですが、その二階建ての方を提供して（中略）旅館を始めることになったが、（後略）
>
> （「二豊の文化」）

旅館を開業した熊八は、連日駅頭に桟橋にと赴き、客人を案内してサービスに努めた。

四　観光宣伝の幕開け
―別府宣伝協会とオトギ倶楽部の発足

油屋熊八・梅田凡平・原北陽・宇都宮則綱の出会い

大正時代、熊八はしだいに知名度を高めた。県道流川通りの拡幅整備に尽力したことによる。町長吉田嘉一郎に説き、浜脇出身の県会議員山田耕平に訴えて一二㍍拡幅実現にこぎ

つけたのである。工事は五年に着工、一〇年に竣工をみた。（『油屋熊八伝』）

この前後熊八の生涯に大きな転機をもたらす出来事があった。梅田凡平・原北陽・宇都宮則綱らとの出会いである。

○梅田凡平（明治二四年～昭和四年）京都出身、元舞鶴銀行支店長でクリスチャン、子供好きで日曜学校の世話などもしていた。転職して京都を去り来別、大正八年不老町へ移住した。絞り店経営の宇都宮則綱と知己になる。（「梅田家資料」）

○原北陽（生没年不詳・別府在住大正八年～昭和五年）京都出身、クリスチャンで写真家、救世軍活動にもかかわり諸国を漫遊来別した。大正八年梅田凡平と再会し別府に在住、後久留島武彦に従い口演童話活動に活躍した。

○宇都宮則綱（明治二二年～昭和四八年）杵築出身、別府鉄輪の三兄宇都宮勘三郎の養子となる。政治家で県会議員・衆議院議員を歴任、鬼山ホテルを創業した。熊八とは凡平を介して知り合った。

（以上『回顧七十年』）

四者を簡単に紹介したが、則綱は若いころは荒くれで蛮勇で鳴らした人物。『回顧七十年』の回想を読むと、凡平も北陽も則綱に劣らぬ独特の風貌を身につけた人物であることが分かる。熊八・凡平・北陽・則綱出会いの時期は、『回顧七十年』・「梅田家資料」から大正八年と推定できる。

別府温泉宣伝協会の立ち上げ

大正九年熊八らは別府宣伝協会を設立した（「梅田家資料」）。この時熊八＝五七歳、則綱＝三三歳、凡平＝二九歳、北陽＝二六歳であった。一番高齢の熊八が、息子ほど年齢の違う三人を束ねる形で活動を開始したのである。則綱は次のように回想している。

僕が作った「別府宣伝協会」がある程度の成果を挙げることができたのは、油屋さんの経済的なバックアップ、梅田、原両君の献身的な活動の賜物である。（『前掲書』）

大正一三年、別府宣伝協会は別府温泉宣伝協会と改称した（梅田家資料）。同年四月に別府市制が施行され、一二月には亀の井旅館がホテルとして再出発したことも背景にあった。ホテルは高級賓客の増加に対応し、ベット・水洗トイレ付き洋室・暖房など当時一流の設備を完備したものであった。温泉宣伝協会の誕生に伴い熊八らは、視野を新天地外国にも広げようとした。凡平の記録につぎの一文がある。

亀の井ホテル内に民衆外務省を設け、自称別府市民衆外

務次官として、民衆外務大臣と国民外交に努力する。

熊八や凡平らの「民衆外務大臣」・「外務次官」などの呼称はこの時を起源とする。

久留島武彦・原北陽の出会いと別府オトギ倶楽部の誕生

別府宣伝協会の成立と同時に同じメンバーで別府オトギ倶楽部が結成された。オトギ倶楽部は明治三九年、童話の里玖珠出身の久留島武彦が、口演童話の開拓普及を目指して東京で設立した組織である。別府オトギ倶楽部結成は、大正八年、武彦が来別して原北陽と接触したことが契機となった。これを裏付ける次の資料がある。

大正八年　別府市、油屋熊八メンバー原北陽と初体面、（原北陽二五歳）以後北陽が前座に童謡、舞踊、カスタネット、水引のおじさんの愛称で武彦と共に全国各地を行脚。（勢家肇『久留島武彦・年譜』玖珠久留島記念室昭和六一年）

中心的な役割を果たしたのは凡平・北陽であった。「大分新聞」で瞥見してみよう。

《大正一〇年八月一四日号》

別府お伽倶楽部主催の大阪地方見学コドモ団五十余名の一行は、十三日午後三時半（中略）中津丸にて、多数父兄其の他に迎えられ大元気にて帰着せり。引率者梅田同倶楽部主事は語る。「（中略）到る処で非常の歓迎を受けたが、（中略）市庁舎で別府ヨイトコの別府宣伝歌を合唱したが市長は非常に喜んでくれた。留守中一部の人から非難を受けたのは遺憾であるが、（中略）自分の誠意が何時か認められる時節が来ると確信して今後も大いに努力すると気焔を挙げた」《大正一一年七月三一日号》

大分三田会主催で来県中の慶応義塾幼稚舎生徒五十人の歓迎会が（中略）大分市公会堂で開かれた。（中略）『地獄を見ました？』『亀川から歩いて血の池地獄を見ました。卵を茄でて御馳走になった。地獄なんて始めて見た。（後略）』、（中略）『別府はすてきです。此の次はお父さんやお母さんと是非一緒に来る』と。（中略）別府オトギ倶楽部の梅田凡平氏亦歓迎の挨拶をなし、同倶楽部原氏は独特の童謡を歌い、梅田凡平氏再び立って『暑くて寒くて五分五分だ』と滑稽踊りに合わせて歌う。

この記事から読み取れることは、オトギ倶楽部の活動が別府宣伝協会の活動と表裏一体であったことである。宣伝協会の宣伝活動は、熊八らのバックアップの下、凡平・北陽の「献身的な活動」によって支えられたのである。

オトギ倶楽部の活動が理解され定着するようになるのは一一年前後で、一一年「大分新聞」八月三日号には、別府港での大阪幼稚園児歓迎の記事に、「埠頭には周旋役たる別府お伽倶楽部のニコニコのお伯さんや水引のお伯さん」と、初めて凡平らの愛称を記し、出迎えも「市丸、日名子両助役、矢野水泳傳習所長、其の他町有志オトギ倶楽部員ら多数」に上ったと報じている。大正一二年八月には巌谷小波のお伽講演会が南小学校で開催されているが、凡平司会で、集まった小学生は一〇〇〇名と報じられた（同八月二三日号）。

オトギ倶楽部の子供たちの頻繁な別府観光に刺激され、中学生や女学生ら修学旅行生も次々に来訪するようになった。「大分新聞」大正一四年七月二五日号は「お伽団や学生続々別府へ、市役所への申し込み既に八団体」と、その盛況を伝えている。

別府温泉宣伝協会と表裏一体のオトギ倶楽部の活動が、別府観光浮揚に果たした役割は実に大きかったのである。

五　温泉観光都市別府の浮揚

別府温泉宣伝協会・オトギ倶楽部が創立されたころ、大戦景気による経済の飛躍的な発展を背景として、別府に遊ぶ湯治客も急増した。別府駅の昇降客数をかいま見よう。

別府・浜脇両駅昇降客数の異動

年次	別府駅	浜脇駅	
大正三（一九一四）	二八六，四二五	一〇九，七〇七	第一次世界大戦始まる
〃八（一九一九）	七二八，九九六	二四七，九七一	ベルサイユ講和会議
〃一三（一九二四）	一，二二六，九八〇	五七三，八一八	政党政治始まる

（『別府市誌』昭和八年）

八年は終戦翌年で熊八・凡平ら四人の出会った年、一三年は亀の井ホテル開業の年である。この前後の主な出来事を挙げておこう。

大正六年　初めて桟橋（木造）完成→九年＝コンクリート改修・朝見浄水池完工

九年　大分新川「九州沖縄連合共進会」開催　観客九七万人

一〇年　地獄循環道路完成

一一年　観海寺大石橋完工

一二年　日豊全線開通　電車軌道桟橋まで延長・大阪商船毎日運航となる

六　循環道路の整備と地獄観光開発

摂政の宮と地獄循環道路の整備

別府温泉観光の目玉とも言える地獄が観光資源として見直されたのは、大正一〇年二月に地獄循環道路が竣工したことによる。ことの起こりは、摂政宮裕仁殿下（昭和天皇）が、大正九年の県北での陸軍大演習に台臨され、帰途別府に立ち寄り地獄を巡られたことに起因する。当時、亀川方面の地獄に行くのには一旦国道に下り、新川沿いにまた上るという不便を忍ばねばならなかった。殿下もまた同じ順路を巡ったのであるが、これが機になって循環道路建設が浮上したと云う。

則綱と熊八とワニの鬼山地獄

『回顧七十年』によれば、明治から大正初期には「地獄は所有者にとって厄介者」で「自殺志願者が毎年二、三人地獄に飛び込んで」死に、「猛烈な熱湯、噴気だから農作物の被害も相当なもので」あったという。「見物しよと思う人は、畦道を苦労して歩いて来た」し、「また別府から来る人は人力車や客馬車にごとごと揺られて」来るというのが実情で、「女子供か、爺さん婆さんが番をしておればそれで済むような商売」であった。

地獄経営が脚光を浴びるようになると、明治末から地獄経営に携わった則綱は早速熊八に相談を持ちかけた。則綱の『回顧』を続けよう。

そこで僕は、（中略）何とか地獄を一人前の企業に発展させようと考えたのである。そのためには珍しい動物を飼ってそれを見せるのがよかろうと思って、ある時油屋さんに話をしてみた。（中略）「いやヘビは嫌いだね。何だか不気味でちっとも愛嬌がない。そこへゆくと河馬はグロテスクだが愛嬌があって良いと思うったのだが――。ところでワニはどうでしょう。」、「ふーんワニね、あれは受けるかも知れないね、（中略）そうだワニと云えば、東洋製缶の高崎達之助さんがたしか宝塚で飼っていたよ。なんなら宝塚に行って見てきたら。」

則綱は、熊八の助言で直ちに動き、ワニ二〇匹と高崎の支援で本格的な地獄観光へ第一歩を踏み出したのである。以後熊八は地獄観覧券問題などにもかかわったが、周知のように亀の井バス会社を起こして地獄巡りを名実共に別府温泉観光の目玉にするのである。

七　奇抜・気宇壮大な宣伝活動

富士山頂に「湯は別府」の標柱

大正一三年、別府市制施行に合わせ別府温泉宣伝協会と改称して新たな活動を開始した熊八らは、内外で奇抜な宣伝活動を展開した。大正一四年、富士山頂に「山は富士　海は瀬戸内　湯は別府」の標柱を建てたのはそれを象徴する動きであった。「大分新聞」は次のように報じている。

去る十七日別府を出発した別府市の富士登山隊一行二十二名は、神戸経由十八日御殿場に到着、（中略）翌十九日午前浅間神社に参拝し、（中略）直ちに出発乗馬で太郎坊に至り、その夜は七合目において一泊し、石室において種々の余興や演説会を催し、室前には一丈の『山は富士　海は瀬戸内　湯は別府』の記念碑を立て、二十日午前五時から出発八合目において御来光を拝し絶頂に達したのは午前九時であったが、其所において記念の温泉宣伝ビラを散布して演説会を催した。（大正一四年七月二一日号）

この標柱の文言は熊八の発想になると言われているが、時に熊八は還暦も過ぎ六二歳、登山は凡平に任せている。このほか熊八は、昭和三年一〇月に、前年実施の「日本八景」選定湖沼の部一位の十和田湖畔に遊び、「別府亀の井ホテル支店建設予定地」なる標柱を立てたが、このほかにも同様の標柱を立て別府宣伝を怠らなかった。

民衆外務省の海外宣伝

大正一三年の別府温泉宣伝協発足に際し、熊八が民衆外務大臣に、凡平が同外務次官に、「国民外交に努力する」（梅田資料）とうたったが、事実大正末期には両人共に中国へ足を延ばし宣伝に努めた。

大正一四、五年先ず凡平が中国に視察・講演旅行に赴いた。一四年のそれは南満州鉄道・朝鮮総督府の招きによるもので、九月一〇日から二カ月間にわたり「満鮮内地子供連盟」を提唱して大連・長春・釜山など二四カ所を巡った。この時凡平は、名刺に「別府温泉民衆外務次官」の肩書を記し各地を巡った。凡平は翌一五年一〇月にも県下有志三〇余名と中国南部を視察しているが（「梅田家資料」）、兼子の「油屋熊八翁」によれば、熊八も同じ一五年秋に上海・蘇州・南京などを巡り、「世界各国人の集まっている上海は、別府温泉を世界に紹介する最も有力な媒介体である」という感慨を抱いたとあるので、熊八、凡平は同道したのではないかと考えられる。

増えはじめた外人観光客

別府観光の目玉・地獄の観光事業化、陸海交通網や上水道などの都市機能の整備、加えて熊八ら宣伝協会主導による観光宣伝の強化もあり、外人観光客も増加するようになった。大正一五年二月には、カナダ太平洋汽船エンプレス・オブ・スコットランド号（三万五〇〇〇トン）が四五〇人の観光客を乗せて寄港、一〇月にはスエーデン皇太子夫妻、英国軍艦八隻などが相次いで来訪した。フランス外交官ポール・クローデルが再度亀の井ホテルに来訪して次の詩を熊八に献じたのもこの二月のことであった。

別府に吾れ再び訪れむ　温(あたたか)きいで湯と温(あたたか)きもてなしに
吾が生命よみがえる　温きいで湯なごやけきひとの心
吾れ再び別府に来たらん

先述の熊八の中国視察の後日談であるが、昭和三年中国の学生たちが来別した。この時熊八は上海旅行で求めた支那服で送迎し、本物以上のスタイルだと絶賛されたという（「前掲書」）。濃やかなサービス精神を忘れない熊八の姿ではある。

熊八伝説の虚実と温泉マークなど

熊八の別府温泉観光の発展に尽くした功績が大きく、また梅田凡平が早世（昭和四年）し、原北陽また昭和五年に別府を去ったことから、真偽織り混ぜて全ての功業を熊八に結びつける「熊八伝説」とも云うべき逸話が誕生したようである。油屋熊八の功績を正しく評価するためには、真実解明こそ肝要である。その一、二を取り上げてみよう。

油屋熊八が旅館開業直後から連日駅頭・埠頭に立って、旅館の宣伝を兼ね来客を歓迎したことは、著名旅館などのひしめく狭間で開業した小旅館主として当然のことであるが、『別府今昔』の次の一文は、事実と異なるのではないかと批判する史家もいる。

別府宣伝のアイディアが熊八を中心にねられたが、（中略）別府桟橋での歓迎策を研究の結果、凡平がモーニングを着てカスタネットを鳴らしながら、"皆さーん、ようこそ別府へおいで下さいました。別府の海も山も旅館も皆さんのおいでを心から歓迎しています"と、大きな声を張り上げることになり、（中略）拡声器のない時代の喜劇的なこの歓迎策は、たちまち別府桟橋の名物になった。

この文を読んだ読者は、既に見た凡平や北陽らの桟橋でのオトギ倶楽部児童歓迎風景を思い起こすことであろう。カス

タネットを鳴らし様々な衣装で歓迎するのは、オトギ倶楽部の口演童話活動につきものであった。新たな奇策ではなかった。凡平らの歓迎風景が一般客のそれと混同されて伝えられたのであろう。次の一文は、大正一二年の大阪商船屋島丸初入港を伝える新聞記事である。

万国旗とオトギ倶楽部の歓迎旗に彩られた別府の埠頭には、朝来別府宣伝委員長格のニコニコ小父さん初め旅館組合関係者の出迎えがあり、一般見物人も加わって大賑わいを呈した――。

（「大分新聞」大正一二年一二月一〇日号）

今一つは、有名な「温泉マーク」の熊八考案説であるが、これは「大分合同新聞」平成五年六月二一日号夕刊に、その誤りであることが詳述されているので、ここでは割愛する。宝塚少女歌劇団招聘についても疑義ありとする史家もあり、今後とも解明が必要であろう。

八　『日本新八景』の選定と九州一大国立公園構想の提起

『日本八景』選定募集と熊八の尽力

昭和二年四月、大阪毎日・東京日々新聞主催の『日本新八景』選定募集が行われた。選定された部門別「新八景」は次ぎのとうりで、別府は「温泉の部」で日本一に選ばれた。

・山岳＝雲仙岳　・渓谷＝上高地渓谷　・瀑布＝華厳滝
・河川＝木曾川　・沼湖＝十和田湖　・平原＝狩勝峠
・海岸＝室戸岬　・温泉＝別府温泉

この選定募集に別府市民の反応は鈍かった。ラジオ放送は大正一四年に東京放送局が設立されたばかり、景勝の選定投票も初体験ともなれば市民の関心薄も当然であった。

工藤元平の回想を引用しよう。

昭和二年かに日本新八景の投票が行われましたが、別府は関心薄で一向に成績の上がらぬのに業をにやして、締切間際に大活躍を演じ、遂に名をなさしめた功績は、油屋さん一人に負うといっても過言ではないでしょう。

（「二豊の文化」）

指摘のように熊八は、これを別府温泉宣伝の好機ととらえ大活躍を演じ、熊八を取り巻く人達も立ち上がった。凡平・北陽・則綱らは勿論、最も大きな力を発揮したのは漫談会の面々（「大阪毎日新聞」七月七日付け）であった。漫談会とはホテル亀の井を集会所にして自由に人生や世事を語り合うサロンであった。熊八と漫談会のかかわりについて医師小川

幸三郎の回想をかいま見よう。

漫談会や国際文化協会などで毎月二、三回はホテルに集まっていましたが、（中略）漫談会には、（油屋さんは）別府に来た有名な人をよく紹介しては話など聞かしてくれました。

これ以外にも火曜会などもあり熊八も参加していた。熊八が市民の無関心に危機感を抱き、ハガキ一、二万枚を用意し投票依頼を活発に展開できたのは、熊八の培った人脈の広さと誠実さの賜物であった。

前掲の大阪毎日新聞は、「市民の感謝文を飛行機で本社へ・祝賀の大演説会も企てられている別府温泉場」との見出しで当選の歓喜に沸く別府市の様子を伝えている。

六日早朝から別府全市に鈴の音勇ましい号外は、別府温泉が日本八景に選ばれたことを報じたので、（中略）万歳の声が湧き起こり、別府亀の井ホテル主人油屋熊八氏は別府市民を代表して神沢市長の感謝文を持って午前十一時飛行機で別府から大阪毎日新聞社を訪問すべく出発した。（天候不良でこの日は見送り）

七月一六日、大阪毎日新聞社の奥村編集総務が「日本八景当選状」を持参、別府市は旗行列で歓迎、一行は亀の井ホテルへ入り市長主催の歓迎会に臨んだ。なお現地大阪での祝賀行事には別府の児童三〇名が招待され、日本八景展覧会場の三越呉服店で童謡や「泉都舞踊」を披露して喝采を浴びた（前掲紙八月一〇日号）。「泉都舞踊」は、作詞＝オトギ倶楽部、作曲＝中山晋平、振り付け＝宇良四又太郎となっており、宇良四太郎は「ウラシマタロウ」と読め、梅田凡平か原北陽ではないかとの推測もある（「人間文化研究」）。

九州一大国立公園構想案の提起

大阪毎日新聞昭和二年八月一四日号に「世界の楽土大別府の偉観」と題する別府観光案内の全面広告が掲載された。熊八の発案と考えられるが、この紙上で熊八は「八景二十五勝百景の決定を機会に九州に一大国立公園の案」と題する国立公園構想を提起した。

私は九州の中央で絶えず噴火を続けている阿蘇山を中心に、八景の別府温泉場と温泉岳（雲仙）とが固く握手して、（中略）兄弟分の二十五勝百景を連結し、更に高千穂も併せて九州における一大国立公園を提唱しているが、関係各県から大賛成を得ているから、今後はこの九州国立大公園の実現に向かってもう運動を続ける覚悟である。現在大分～熊本～長崎を結ぶ観光遊覧道路として親しまれ

ている九州横断道路の構想は、昭和初年油屋熊八によって提唱され、別府―飯田線の改修を県に実現させたのが最初である。昭和二年以降、各県知事署名の「趣意書」の発表や「期成会」の結成などが続き、昭和六年には大分県知事阿部喜七・熊本県知事本山文平・長崎県知事木下信長ら二二名による「九州横断国際遊覧大幹線」建設の請願が国に出さるまでに構想は現実化した（『大分歴史辞典』ＯＢＳ）。六年は満州事変の始まった年である。以後〝非常時〟のかけ声とともに構想は行き詰まる。

熊八と久住高原

熊八と飯田・久住高原との出会いについては、工藤元平が次のように語っている。

私が初めて油屋さんにお目にかかったのは、たしか大正六年で、横山健堂氏を油屋さんが招いた時で、（中略）その後油屋さんが大変飯田高原に力を入れるようになったので、一日お目にかかって、久住の方にも是非こられるようお話ししましたら早速やってきて、飯田高原もいいが、成る程ここの展望も素晴らしい、特に阿蘇を望む波野一帯の雄観は大変お気に入ったようでした。昭和の初め六月頃だったと思います。

（「二豊の文化」）

これによれば、熊八が久住高原に関心を抱くようになった時期は、九州国立公園構想を提起した時期と重なるが、工藤は「ここで久住、阿蘇、雲仙を結ぶ大構想が芽生えたのではないか」と推定している。なお飯田高原「長者原」の命名者は熊八であったという（「油屋熊八翁」）。なお『大分の伝説上巻』（大分合同新聞社・昭和四九年）は、「大正十四年に（中略）油屋熊八翁がキャンプ村を開設したさい命名したことに起因する」としている。

熊八は皇族や知名士をよく飯田・久住高原に案内したが、思わず頬も緩む逸話もあるが紙面の関係もあり割愛する。別府が「温泉の部」日本一に選ばれた際、新聞社嘱託俳人高浜虚子が派遣され、一日熊八の案内で湯布院から飯田高原に遊んだことがあった。次の一文はその感慨を綴った虚子の紀行文である。紹介してこの項の結びとしたい。

午前六時に目ざめて顔を洗ったばかりで、飯も食わずに自動車に乗って、私は五里の山里を由布院村へと志した。亀の井主人油屋熊八氏東道（案内の意）のもとに、日名子太郎氏、満鉄の井上到也氏、大阪毎日別府通信所の本條史郎君と共であった。

鶴見の山背を越える頃になると由布の峰がポカリと現れはじめた。豊後富士の称があるだけあってその尖峰が人の目をひく。（中略）『時間が遅れると靄がはれてしまう』と熊八氏が心配していたが、山路が開けて一帯の谷を見渡した時に、『あゝもう靄ハ晴れている』と落膽した。取りあえず亀の井別荘亀楽園に憩う。この別荘は瀟洒たる小さい別荘であるが、竹縁に腰を下ろして仰ぐ由布の尖鋒は類いなく美しい。（中略）私たちはこの別荘で熊八氏の用意してくれたサンドウィッチを食し、やがて自動車に乗って更に六里の山路を越えて、飯田高原に行くことになったのである。

（『別府市誌』昭和八年より）

工藤元平は「油屋さんほど知名の士を多く別府に呼んだ人はない。特に有名な歌人、文士、画家などを惜しげもなく招待した。」というが、この文はその一端を彷彿とさせる。

九　観光事業の開発と亀の井自動車株式会社の創設

亀の井自動車株式会社創立と地獄遊覧バス運行

昭和三年一月、熊八は亀の井自動車株式会社を創立した。前年一一月に当時としては破天荒の二五人乗り大型バス四台を安価に購入して、地獄観光の事業化に乗り出した。

大正一〇年の地獄循環道路の開通以来、地獄遊覧は別府観光の目玉となった。一四年には泉都自動車が遊覧を一日七回に増便し、人力車、客馬車、乗合自動車（六人乗り）入り乱れて地獄観光にしのぎを削っていた。乗車賃一円の大型バス登場は、これら業者に大きな衝撃を与え紛議も生じたが結局は業者側が折れて三月には収束した。背景に後述する観光熱の高まりと遊覧客の飛躍的な増加があったと推測される。

バスの始発所は流川一町目角、伊予屋旅館（当時）一階に「定期乗合地獄遊覧自動車始発所」の看板を掲げた。所要時間二時間、途中乗車自由としコースは次のようであった。

《始発所》―別府駅―桟橋―浜脇―流川―鶴見園―観海寺―八幡地獄―鶴見地獄―鉄輪―鬼山地獄―カマド地獄―十万地獄―新坊主地獄―海地獄―柴石―血の池地獄―亀川温泉―別府駅

女性バスガイド登用で別府宣伝

地獄遊覧コース編成は、現別府市域の観光名所を網羅して別府温泉観光の大宣伝を兼ねるものであった。宇都宮則綱は、「油屋さんは別府温泉を売り出した大恩人であり、地獄にとって地獄巡りのバスを全国にさきがけて設けてくれた忘れるこ

との出来ない人である。(『回顧七十年』)」と回想している。

事実熊八は、この地獄遊覧バスの運行の場においても、全国初の女性バスガイド登用という最も効果的な観光宣伝の方法を考えたのであった。ブルーの上衣とギャザ・グレーのスカート、白ネクタイ姿の美人ガイドと江戸・明治と引き継がれた七五調の名所案内は忽ち大評判となり、別府観光の花形になった。この成功の蔭には妻ユキの姉婿で会社専務理事を務めた薬師寺知隴(ともひで)の存在があった。

朝鮮日報社会部副部長の経歴を持つ薬師寺は、"不老暢人"称し別府不老町に居住した。優れた学識者と考えられるが、地獄遊覧ガイトの案内文案の作成から接客サービスの方法まで立案し、姿勢・目線・声調・発声・間合い・方向指示など細部にわたり訓練を施したという。『別府市誌』(昭和八年)はこの地獄遊覧バスを次のように讃えている。

別府近郊回遊線、耶馬渓由布院回遊線、別府日田線、別府速見郡上村ゴルフ場線、殊に別府近郊回遊線には、服装軽快なる少女車掌を乗組ましめ、明晰流麗而も簡潔なる詞もて沿道旧蹟を説明せしめ、乗客の好評を博せり。

この成功の裏には、当時の別府市における観光熱の高まりがあった。昭和三年四月一日から五〇日間にわたり、別府市制五周年記念の中外産業博覧会が別府公園を中心に開催された。満蒙・朝鮮・台湾・南洋館等の特設館も設けた大規模なもので、入場者数は八二万を数えた。観光熱が非常の高まりをみせたことは当然で多くの観光関連施設が誕生した。鶴見園(大正一四年)、亀の井自動車・信栄寺大仏・別府競馬場・浜脇高等温泉・別府公会堂(昭和三年)、ケーブルカー・商工会議所創立・快速船すみれ丸就航(同四年)などがそれである。次の別府ゴルフ場もこのような雰囲気の中で日の目を見た。

別府ゴルフ場の開設

昭和五年八月、別府ゴルフ場が誕生した。本社は大阪の別府ゴルフ土地株式会社、ゴルフ場は「別府ゴルフ倶楽部」と称した。開設のきっかけを作ったのは則綱、熊八、凡平ら別府温泉宣伝協会のメンバーであった。則綱はこう語っている。

大正十何年の正月元旦だったか二日の朝だったか、僕は梅田と二人で亀の井に年始に行った。そして油屋さんと雑談していると、「別府にもゴルフ場がほしいな」という話が出た。そこで僕が、豊岡の上に南畑というゴルフに持って来いの土地があるんだがなというと、油屋さんがその土地を今から見に行こうじゃないかということに

なって、早速三人で見に行った。（中略）いろいろ相談の結果ゴルフ場の建設資金は大阪商船に出してもらおうということになり、僕が交渉を引き受けた。

則綱の説得が功を奏し、大阪商船村田章蔵専務がポケットマネー一五万円を拠出し、則綱、熊八らの尽力によって竣工にこぎつけたのである。会長には村田章蔵、その下に倶楽部評議員、同理事、同委員が置かれたが、則綱や熊八は委員として名を連ねた。

八月三日、開場式が挙行されたが、大分新聞は「日本一を誇る／別府ゴルフ場開場式／名士や名選手三百余名を招き／三日盛大に挙行」と、その模様を次のように伝えた。

会場には大テント三張を設け、控所、式場、並びに亀の井特設のバーに当て、会場と頭成駅（現豊岡駅）との間には絶えず専用の無料車八台を運転し、続々と詰めかけた来賓を会場に送り込む等遺憾なき手配りであった。

（昭和五年八月4日号）

熊八日本代表で世界ホテル業者大会へ

多事の中熊八は、昭和四年二月、米国太平洋海岸ホテル協会の招きで、シャトルで開催の「世界ホテル業者大会」に日本代表（九人）として参加した。『油屋熊八伝』によれば、「別府民衆外務大臣」の肩書と、英文で「日本観光では世界に誇る別府温泉が日本一だ、だから別府観光へどうぞ」と書かれた名刺を使い、また「日本の別府温泉」と染め抜いた陣羽織を着用して各地を巡ったともいう。前年「世界日曜学校大会」に参加した凡平が同様のいで立ちで渡米しているので（梅田家資料）、事実とすれば宣伝協会で相談の上のことであるかもしれない。滞米中、熊八は飛行機でロサンゼルスに引き返し、またメキシコにも足を延ばし各地で別府温泉との宣伝に努めた（「油屋熊八翁」）。なお熊八はこの年創立された別府商工会議所の序列三位の議員に推され、また前記すみれ丸（一七四九トン）就航に尽力している。（『別府市誌』昭和六〇年）

熊八の渡米と同年の昭和四年四月一日、別府温泉宣伝協会の盟友であった梅田凡平が他界した。享年三九歳の若さであった。

「梅田家資料」によれば凡平は、前年の三月三日からロサンゼルスで開催された「第一〇回世界日曜大会」に日本代表（二〇〇名）として出席した。別府からは凡平のほかに川島唯次郎・永見左衛門・里村ミツヱが参加している。このとき凡平は陣羽織を着て神戸港を出港、現地でも桃太郎姿を披露

し別府宣伝にも努めた。熊八らはこれを応援して後援会を結成したが、全国の地名士四七名の連署があり、凡平の人脈の広さを示している（堀田穣「油屋熊八伝説の生成」『人間文化研究』所収）。

一〇　晩年―開業二〇周年と大掌大会

開業二〇周年記念大会

昭和六年八月二日、亀の井ホテル開業二〇周年記念式典が市公会堂で催された。「大分新聞」は次のように伝えている。

別府亀の井ホテルでは、一日の開業記念祝賀会に引き続き、市公会堂で学童の会を二日午後から開催したが、市内外小学生を始め一般入場者が押しかけ盛況であった。先ず油屋社長の開会の辞があって、英以教会幼稚園児の独唱や舞踊があり一同を喜ばせたが、それより久留島武彦氏のお伽噺を始め（中略）諸氏等の話があり、午後五時閉会、同夜は七時から同所で文芸講演会を開催する。講師は長谷川伸、江見水蔭、平山蘆江ら大衆文学作家らであった。

既述のように、梅田凡平は昭和四年に世を去り、原北陽また久留島武彦と行を共にし、別府観光宣伝に明け暮れた盟友は則綱を除き存在しなかった。公会堂での式典の余興に、久留島武彦を招き口演童話を演出したのは、宣伝協会と表裏一体で別府宣伝に尽くした、凡平・北陽・オトギ倶楽部への挽歌であったのかも知れない。それにしても、商いを第一とする一ホテルの創立記念祝典に、児童や一般市民の参加を求め、著名な童話作家や大衆文学者を招いて講演会を催すなどのことは、市井では考えられないことであろう。熊八が身銭を切って多くの芸術家や文学者などを招いたことが、単なる観光宣伝に止まるものではなく、熊八の内に培われた教養のしからしめたものであったとも考えられる企画ではある。

河合藤七（白水館主・漫談会幹事）の回想に「ご自身虻蜂と号してよく俳句を作ったりしましたが、中に『又一つ橙（だいだい）をつかむ大熊手』『春めくや熊手を振う突猪（とっちょ）かな』などというのがあります」との一文がある。熊八の知られざる一面である。

全国大掌大会の開催

ホテル創立20周年記念行事の一環として一〇月別府市公会堂で開催したのが、「全国大掌大会」であった。熊八の右掌が特別に大きかったことは残された手形で明らかであるが、佐藤巌の回想によれば「掌の大きいのは右手ばかりで、左右

の両手を比べると別人のようです。」とある。兼子鎮雄によれば、これは「一〇年間、明け暮れ米をはかるときに使った、その精励の結果を物語る」ものであったが、明治三三年熊八が東京で関取常陸山を招宴し、手のひら比べをやった際、寸分違わぬ大きさに常陸山も驚いたという。(『大分県の産業先覚者』)

大会の主旨は、「大きな手のひらは労働に忠実な証拠、したがって健康な証拠、大掌は心身共に健全な表示、日本国民のすべてが大掌であれ」(同前掲書)とのことであったが、熊八が某氏に贈った手形(「地獄のある都市」別府市観光協会)には次のように添え書きがある。

是象青年時代家業に奮戦したる努力の結晶也何事も健康第一　昭和九年八月長崎政次郎氏に汎日本人中二十番目といふ折紙つきの大手形を振出して遥に御健勝をいのる

由布山荘にて　亀の井主人　(落款○印)七十青年

労働を尊ぶ精神は、キリスト教(新教)の感化とも考えられる。兼子鎮雄によれば、新約聖書の「わが父は今にいたるまで働き給う、われもまた働くなり」(ヨハネ伝第五章一七)は、熊八愛唱の聖句であったという(前掲書)。

審査の結果、審査掌影の募集に応募した男子一〇〇名・女子八名が入選したが、大掌大会受賞式には九州一と喧伝された鶴見園の歌劇団も出演して興を盛り上げた(『別府今昔』)。なお熊八の大掌は指長九四ミリ・掌長一二四ミリ・掌幅九七ミリで選抜者中二〇位であった。熊八の順位について全国七位との説(『別府今昔』)もあるが、先述の「手形添え書き」にあるように、二〇位が正しいであろう。熊八の大掌は「大熊手」と呼ばれて一躍有名となり海外も含め注文が殺到、昭和九年末には発行手形は四〇〇〇枚を突破したという。

晩年―なお観光別府の浮揚に尽力

熊八は、晩年なお万年青年と称し精力的に活動した。その一、二を拾ってみよう。

熊八の親しく付き合った亀井アイの回想によれば、昭和八年(熊八七〇歳)中国新京(旧満州国首都・現吉林省長春)を訪れた熊八は、次のように別府宣伝に尽力したという。

油屋さんは早速県人会のために別府宣伝の応援旗を寄贈してくれ、(中略)市内目抜き通りのアーク燈四八本に別府宣伝の広告を出したり、ビューロウに別府温泉と亀の井ホテルのポスターを掛けさせたり、或いはその頃珍しいとされた飛行機で各地を飛び回っては別府の宣伝をしていました。新京に見えました時は、ちと血圧が高い

のでボタモチを頼むと言って来ましたので用意してもてなしました。（中略）ホテルのためにも一生懸命でしたが、私利私欲を離れて別府宣伝に終始一貫された尊さには頭が下がっておりました。

同じ昭和八年には志高湖キャンプ場開設に努め、また九年には鐘淵化学紡績城島春緬羊場誘致に尽くすなど、倒れるまでついに別府宣伝を疎かにすることはなかった。時期は不明であるが、別府の将来を見越して高崎山麓を購入したことなども特筆すべきことであろう。

終焉

昭和一〇年二月二四日、熊八は、鶴の居ホテルに来客を訪問中脳溢血で倒れた、三月二七日午後四時四五分、妻ユキらの看病の甲斐もなくその波乱に富んだ生涯を閉じた。享年七三歳であった。「大分新聞」三月二八日号は、その死を悼み功績を次のように称えた。

（見出し）〝別府宣伝に献身した大掌翁〟油屋熊八氏ついに起たず波瀾重畳の生涯、氏は明治四十一年別府に来てささやかな旅館亀の井を創業、（中略）株式会社に改めて現在の亀の井ホテルを造りあげた。氏は更に株界鉱山などに手を出し、東奔西走席を温めるを知らぬ活動を続けた。別府温泉の宣伝にも全力をあげた別府の恩人であり、「別府の油屋」と云えば全国に通るほど有名となっていた。キリスト教を信じ全国禁酒連盟員たるのみならず、その宣伝に尽くしていた。常に青年油屋と誇称して自己の大掌を自慢して全国大掌大会を開いたこともあり、最近は鐘紡の城島原緬羊場、鶴崎方面の工場誘致に尽力していた。

四月六日には市公会堂で盛大な告別式が挙行された。なお当日並びに一周忌の弔電・文などに添えられた俳句などを紹介しておこう。

開くだけ開いて散った桜かな　小杉天外
ヒオドシの武者振り何処散る桜　吉田初三郎
花は咲くに赤ネクタイの翁在さず　相良春亭
思いでの赤ネクタイや春の宵　長松二水
春めくや赤ネクタイの温泉の亭主　永田青嵐（掛け軸）

昭和二八年一〇月、油屋熊八の功績を永久に顕彰するために、記念碑と記念公園が建造され一一月一日除幕式と碑前祭が挙行された。なお平成一六年一〇月三一日には新たに建造された功績碑の除幕式も営まれた。